

目 次

ガイドラインの基本的事項	1
--------------	---

1 章 小児肝がん 7

I アルゴリズム	8
II はじめに	9
III クリニカルクエスション	10
CQ1 小児肝がんの治療方針の決定に必要な分類と検査は	10
CQ2 腫瘍生検は必要か	12
CQ3 初診時（化学療法前）に切除可能であれば切除した方がよいか	14
CQ4 肝芽腫に対する腫瘍の完全切除の意義は	17
CQ5 肝細胞癌に対する腫瘍の完全切除の意義は	19
CQ6 肝腫瘍切除の前に血管造影は必要か	21
CQ7 肺転移巣に対する外科療法の役割は	23
CQ8 小児肝がんに対する肝移植の適応は	25
CQ9 肝芽腫に対する標準的化学療法は	28
CQ10 肝細胞癌に対する化学療法の適応は	31
CQ11 小児肝がんに対する大量化学療法の適応は	33
CQ12 静注化学療法と比較した動注化学療法（塞栓術を含めて）の意義は	35
CQ13 肝芽腫に対する放射線治療は有効か	37
CQ14 再発腫瘍に対する治療方針は	39
CQ15 難治性小児肝がんに対する新規治療薬は	41
CQ16 小児肝がん治療における合併症とその対応は	43

2 章 小児腎腫瘍 47

I アルゴリズム	48
II はじめに	49
III クリニカルクエスション	50
CQ1 小児腎腫瘍の治療方針の決定に必要な分類と検査は	50
CQ2 標準的な外科療法は	57
CQ3 両側性腎芽腫（stage V）に推奨されるマネージメント・外科療法は	60
CQ4 Stage I の予後良好組織型の腎芽腫に推奨される化学療法は	64

CQ5	Stage II の予後良好組織型の腎芽腫に推奨される化学療法は	67
CQ6	Stage III, IV の予後良好組織型の腎芽腫に推奨される化学療法は	70
CQ7	腎明細胞肉腫に推奨される化学療法は	72
CQ8	腎ラブドイド腫瘍に推奨される化学療法は	75
CQ9	腎芽腫症に対する治療方針は	77
CQ10	安全性を考慮した基本的な化学療法の方針は	79
CQ11	標準的放射線治療とは。その適応は	81
CQ12	再発後の治療法は	85
CQ13	晩期合併症にはどのようなものがあるか	88
CQ14	再発に対する追跡はどのように行うか	91

3章 骨肉腫 93

I	アルゴリズム	94
II	はじめに	95
III	クリニカルクエスチョン	96
CQ1	骨肉腫の治療方針の決定に必要な分類と検査は	96
CQ2	予後因子で治療法を変更することができるか	99
CQ3	術前化学療法の治療効果は画像で評価できるか。術前化学療法が著効した場合、縮小手術は可能か	101
CQ4	低悪性度骨肉腫の治療法は	103
CQ5	通常型骨肉腫の標準的外科療法は	105
CQ6	切断、離断を行う際に、どのような検討を行うべきか	107
CQ7	病的骨折を併発した骨肉腫に対する患肢温存手術の妥当性は	109
CQ8	通常型骨肉腫の標準的化学療法は	111
CQ9	一期的に手術可能な通常型骨肉腫に対して術前化学療法は必要か	113
CQ10	肺転移に対する自家造血細胞移植併用大量化学療法は有効か	115
CQ11	摘出不能な骨肉腫に放射線治療は有効か	117
CQ12	骨肉腫肺転移に対する外科療法と化学療法は	119
CQ13	局所再発を起こした場合の治療法は	121
CQ14	治療後の経過観察の方法は	123

4章 中枢神経外胚細胞腫瘍 125

I	アルゴリズム	126
II	はじめに	127
III	クリニカルクエスチョン	128
CQ1	中枢神経外胚細胞腫瘍の治療方針決定に必要な分類と診断方法は	128

CQ2	一期的手術の原則とその方法は	132
CQ3	標準的化学療法と治療期間は	136
CQ4	術前化学療法の適応は	139
CQ5	未熟奇形腫に対する化学療法の適応は	141
CQ6	Stage I 性腺胚細胞腫瘍に対する外科療法ならびに化学療法の適応は	143
CQ7	放射線治療の役割は	145
CQ8	化学療法抵抗性または化学療法後の再発腫瘍に対する治療法は	146
CQ9	自家造血細胞移植併用大量化学療法の適応と有効性は	148
CQ10	治療に関連する合併症とその後の経過観察は	150

5章 網膜芽細胞腫 153

I	アルゴリズム	154
II	はじめに	155
III	クリニカルクエスション	156
CQ1	網膜芽細胞腫の治療方針の決定に必要な分類と検査は何か。腫瘍生検による病理診断は必要か	156
CQ2	遺伝子検査は行うべきか	161
CQ3	眼球摘出の適応と播種の危険性は	163
CQ4	片眼性の眼球温存治療は許容されるか	165
CQ5	局所治療単独（小線源治療，レーザー，冷凍凝固）の適応は	167
CQ6	眼球温存治療後，眼底検査で腫瘍が不活化している場合に行う内眼手術は安全か	169
CQ7	眼球温存のための全身化学療法レジメンは	171
CQ8	局所化学療法は有効か	175
CQ9	眼球摘出後の化学療法は必要か	178
CQ10	遠隔転移など眼球外進展例に対する最適な治療法は	180
CQ11	全身化学療法で三側性網膜芽細胞腫，眼球内新生腫瘍は予防できるか	183
CQ12	眼球温存のための放射線外照射の適応およびその照射方法は	185
CQ13	遠隔転移再発例への治療法は	188
CQ14	眼球摘出後の経過観察はどのように行うべきか	190
CQ15	眼球温存治療を行った場合の経過観察はどのように行うべきか	192
CQ16	家族歴のある場合の経過観察はどのように行うべきか	194
CQ17	二次がんのスクリーニング検査は必要か	196

6章 神経芽腫 199

I	アルゴリズム	200
---	--------	-----

II はじめに	201
III クリニカルクエスション	202
CQ1 神経芽腫の治療方針の決定に必要な分類と検査は	202
CQ2 PET 検査は有意義か	206
CQ3 局所性神経芽腫の生検と一次的切除の適応についての指標は	208
CQ4 ダンベル腫瘍への椎弓切除の有効性は	210
CQ5 神経芽腫の内視鏡手術による腫瘍摘出の是非は	212
CQ6 腹部神経芽腫の手術における腎合併切除の意義は	213
CQ7 放射線治療の有効性とその適応は	214
CQ8 術中照射は有効か	216
CQ9 無治療経過観察の適応と安全性は	218
CQ10 外科的全摘可能な低リスク群腫瘍に対する標準治療は	220
CQ11 外科的全摘不能な低リスク群腫瘍に対する標準治療は	222
CQ12 Stage MS 腫瘍への放射線治療, 化学療法の意義と適応は	224
CQ13 中間リスク群腫瘍に対する標準治療は	226
CQ14 神経芽腫の stage 4 に対する外科療法の原則は	228
CQ15 高リスク群に対する寛解導入療法は	230
CQ16 高リスク群に対する自家造血細胞移植併用大量化学療法の有効性は	232
CQ17 高リスク群に対する同種移植の有効性は	234
CQ18 再発腫瘍に対する救済療法は	236
CQ19 中枢神経系再発への対応は	238
CQ20 神経芽腫への分化誘導療法は有効か	240
CQ21 神経芽腫への免疫療法は有効か	242
CQ22 神経芽腫への MIBG 治療は有効か, その適応は	244
CQ23 治療効果判定の方法は	246
CQ24 眼球クロモス / ミオクロモス症候群への対応は	248

7章 横紋筋肉腫

251

I アルゴリズム	252
II はじめに	253
III クリニカルクエスション	254
CQ1 横紋筋肉腫の治療方針の決定に必要な分類と検査は	254
CQ2 PET は転移巣や腫瘍生存 (viability) の診断に有用か	259
CQ3 生検と一次的手術の適応は	261
CQ4 傍精巣腫瘍の場合の病期を決定するための同側後腹膜リンパ節郭清 (SIRPLND) は再発を減少させるか	263
CQ5 リンパ節郭清の範囲, 方法と意義は	265

CQ6	化学療法前腫瘍再切除 (PRE) の適応は	267
CQ7	頭頸部原発腫瘍に対する手術方針は	268
CQ8	四肢原発腫瘍に対する手術方針は	270
CQ9	膀胱・前立腺原発腫瘍に対する切除方針は	272
CQ10	遠隔転移巣に対する局所治療の方針は	274
CQ11	放射線治療の至適開始時期, 基本方針は	276
CQ12	頭頸部, 眼窩, 傍髄膜原発腫瘍に対する放射線治療を化学療法と同時に開始する適応は	278
CQ13	強度変調放射線治療 (IMRT), 陽子線治療の適応は	280
CQ14	低リスク群に対する標準的化学療法は	282
CQ15	中間リスク群に対する標準的化学療法は	284
CQ16	高リスク群に対する標準的化学療法は	286
CQ17	高リスク群に対する自家造血細胞移植併用大量化学療法は有効か	287
CQ18	再発後治療の化学療法レジメンにはどのようなものがあるか	289
CQ19	再発腫瘍に対する局所治療の役割は	292
CQ20	有効な分子標的治療は	294
CQ21	肝中心静脈閉塞症 (VOD) の診断基準にはどのようなものがあるか	296
CQ22	標準治療による長期合併症や再発の経過観察はどのように行うか	298

8章 ユーイング肉腫ファミリー腫瘍

301

I	アルゴリズム	302
II	はじめに	303
III	クリニカルクエスチョン	304
CQ1	ユーイング肉腫ファミリー腫瘍 (ESFT) の治療方針の決定に必要な分類と検査, 診断のために必要な検査は	304
CQ2	推奨される手術法 (切除範囲) は	307
CQ3	限局例における外科切除縁と放射線照射線量の関係は	308
CQ4	限局例に対する標準的化学療法は	310
CQ5	限局例に対する初回化学療法後の組織学的治療効果と予後との関係は	313
CQ6	限局例における骨髄への微小転移による全身再発への影響は	315
CQ7	骨盤原発の限局例に対する適切な局所治療は	317
CQ8	肺転移例に対する全肺照射は有効か	319
CQ9	転移例に対する標準的治療は	321
CQ10	再発例の治療法は	325
CQ11	局所治療の晩期合併症は	328
CQ12	化学療法による晩期合併症は	329
CQ13	再発の経過観察の方法は	332

9章	その他のまれな腫瘍	333
I	はじめに	334
II	クリニカルクエスチョン	335
CQ1	以下の疾患群の治療方針の決定に必要な分類と検査は	335
	・乳児型線維肉腫	
	・滑膜肉腫	
	・胞巣状軟部肉腫	
	・悪性ラブドイド腫瘍	
10章	腫瘍生検・中枢ルート	339
I	はじめに	340
II	クリニカルクエスチョン	341
CQ1	腫瘍生検におけるサンプルのサイズ、質は	341
CQ2	腫瘍生検において注意すべき合併症は	343
CQ3	巨大縦隔腫瘍における安全な腫瘍生検方法は	345
CQ4	中枢ルート造設の方法にはどのようなものがあるか	347
CQ5	中枢ルート造設における合併症とその対策は	349
CQ6	中枢ルートの標準的管理法は	351
CQ7	中枢ルート挿入中の合併症とその対策は	353
	略語一覧	355
	薬剤名一覧	359
	索引	360